

津市図書館稲垣文庫蔵「東砂葛記」について：志筑忠雄訳「阿羅祭巫来歴」の一転写本

大島, 明秀
熊本県立大学文学部：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/1449084>

出版情報：国文研究. (59), pp.1-13, 2014-05. 熊本県立大学日本語日本文学会
バージョン：
権利関係：

津市図書館稲垣文庫蔵「束砂葛記」について
——志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」の一転写本——

大島 明 秀

津市図書館稲垣文庫蔵「東砂葛記」について

—志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」の一転写本—

大島 明 秀

はじめに

三重県津市図書館には、地理学や天文学にとりわけ深い関心を寄せた伊勢の商人稲垣定穀（一七六四—一八三五）の旧蔵書が収められている。定穀が生きた十八世紀後半から十九世紀前半の時代背景を映し出すように、ロシアをはじめとした対外関係に関する文献も所在している。

その一つである「東砂葛記」写本は、そもそもは中津藩医でいわゆる「蘭学」に精通した前野良沢（一七二三—一八〇三）が著した作品（一七九一成）であるはずが、同館の資料目録には「東砂葛異記／ハレンテイン、フランソイス著／享保一九（一七三四）」と記載されている。

この情報から、津市図書館蔵「東砂葛記」は、昌平坂学問所で教鞭を執ったことで著名な儒学者古賀侗庵（一七八八—一八四七）旧蔵本と同じく、志筑忠雄（一七六〇

—一八〇六）訳「阿羅祭亜来歴」（一七九五成）を所収する

系統の「東砂葛記」である可能性が高まった。

先に発表した拙稿「志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌」を踏まえながら、以下、津市図書館蔵「東砂葛記」写本の資料的位置づけについて検討する。

一、津市図書館蔵「東砂葛記」の書誌

結論から言えば、津市図書館蔵「東砂葛記」には志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」が所収されている。先に発表した拙稿では六点の「阿羅祭亜来歴」を報告したことから、数えて七点目の発掘となる。したがって、本資料の書誌番号を7として書誌を述べる。加えて、近年の台湾大学の調査成果にも当該資料が認められたので、これを8として掲げしておく。ただし、未だ実見を果たしていないため、書誌の

紹介のみに留めておく。

7、津市図書館（稲垣文庫）

法量：二四・〇×一六・七糎

形態：写本、一冊

紙数：一六丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：東砂葛畧記（墨書打付）

内題：東砂葛記

（志筑）跋文の年記・署名：癸亥十月 通詞志筑忠次郎譚

大槻跋文の年記・署名：なし

蔵書印記：「從雉堂藏」（朱・陽）

備考：「羅祭亜来歴（莫新略 比華ナリ）」は一丁表～一六丁裏（二〇

丁裏に「羅祭亜来歴」を紹介した前文がある）

：「從雉堂」は稲垣定毅の号⁴

：古賀侗庵の奥書は不在

：朱入れあり

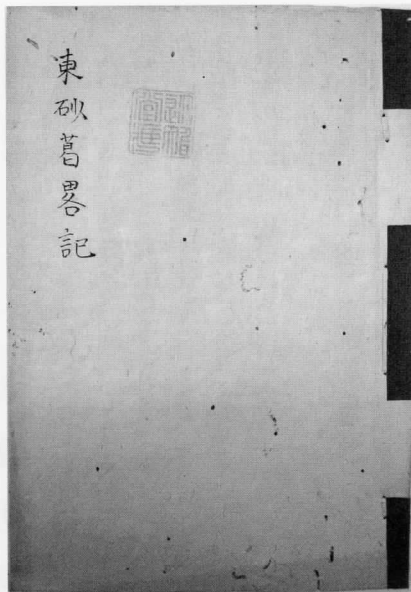


図1 津市図書館本の外観。外題と「從雉堂藏」朱印が見える

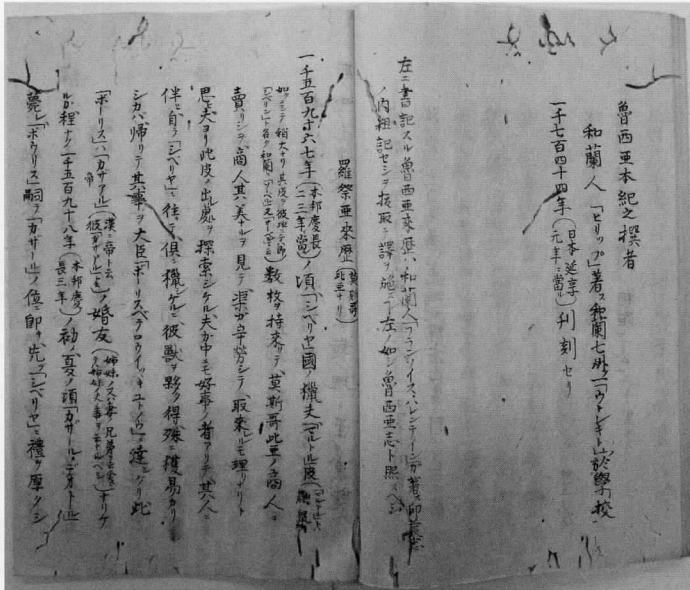


図2 「阿羅祭巫來歴」該当部分の冒頭

8、台湾大学図書館（長沢文庫）

法量：二六・九×一八・二糎

形態：写本、一冊

紙数：一四丁（表紙を除く）

表記：漢字平仮名交じり文

外題：文化甲子魯西亜國王呈和文之上書 文化甲子魯西

亜國横文和解傍釋

内題：不明

（志筑）跋文の年記・署名：寛政七卯□月日 志筑忠雄譚

大槻跋文の年記・署名：癸丑十月録

蔵書印記：なし

備考：未見。『国立台湾大学図書館典藏「長沢文庫」解

題目録』より

：前半は「阿羅祭巫來歴」、後半は文化元年

（一八〇四）にロシアから奉られた日本語書状の

写し

：巻末に識語「天保六乙未年「一八三五」五月廿八

日令写畢／同七月廿八日一校畢／長澤伴雄⁶」

（朱）あり

：本資料は二跋文系統に位置づけられる⁷

：戦災焼失した礫川文庫旧蔵「魯西亜國王呈和文之上書」と内容を同じくする資料か

以上のように、津市図書館本は、「東砂葛記」の一部として「阿羅祭亜来歴」が所収されていること、当該部分の題名が「羅祭亜来歴」であること、「癸亥二八〇三」十月（通詞志筑忠次郎譯）との（志筑）跋文の年記・署名を有することなどから、早稲田大学本（書誌6）の系統に属する資料と目される。

以下、参考のため既に発表した六本の書誌を掲げておく。

1、国立公文書館（内閣文庫）

法量：二七・二×一八・一糶

形態：写本、一冊

紙数：一八丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：東砂葛記（題箋、墨書）

内題：東砂葛記

（志筑）跋文の年記・署名：癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯

大槻跋文の年記・署名：なし

蔵書印記：「編脩地志備用典籍」（朱・陽）

：「秘閣圖書之章」（朱・陽）

貼紙：「土」（表紙、墨書）

：「原〇三百六十二函」（表紙、朱書、「〇」のみ墨書）

備考：題箋に書された外題に続いて、表紙に直接「全」と墨書打付されている

と墨書打付されている

：前野良沢「東砂葛記」（二七九一成）の一部として

所収（「羅祭亜来歴^{比羅斯ナリ}」は一二丁表〜一七丁裏）

：「編脩地志備用典籍」は昌平坂学問所の印

：年記・署名は無いものの、書誌6と同じ「羅祭亜

来歴^{比羅斯ナリ}」に対する古賀侗庵の奥書あり

：「秘閣圖書之章」は紅葉山文庫旧蔵本、若しくは

明治新収本であることを示している

2、洲本市立洲本図書館

法量：二二・二×一六・八糶

形態：写本、一冊

紙数：九丁

表記：漢字平仮名交じり文

外題：阿羅祭亜来歴（朱書打付）

内題：阿羅祭亜来歴 阿羅祭亜ハ莫斯比羅ナリ

志筑跋文の年記・署名：寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名：癸丑十月録

蔵書印記：「柴氏家藏圖書」（朱・陽）

：「柴邦彦圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林

莊之萬卷樓」（朱・陽）

貼紙：「心」(表紙、墨書)

備考：蔵書印者は、寛政の三博士として周知される朱子

学者柴野栗山(一七三六—一八〇七)

：癸丑は寛政五年(一七九三)

3、静嘉堂文庫

法量：二五・八×一七・九糎

形態：写本、一冊

紙数：三七丁

表記：漢字平仮名交じり文

外題：魯西亜志附録 (題箋、墨書)

内題：魯西亜志附録

志筑跋文の年記・署名：寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名：癸丑十月録

蔵書印記：「大槻文庫」(朱・陽)

：「梅陰書屋」(朱・陽)

貼紙：なし

備考：吉雄幸作「魯使北京紀行」(一七七八成)と合綴(「魯

西亜志附録」は二丁表—一四丁裏)

：「大槻文庫」は、仙台藩校養賢堂で学頭を務めた

漢学者大槻磐溪(一八〇—一八七八)の印

：「梅陰書屋」は、朱子学者大黒梅陰(一七九七—

一八五二)の印。ロシア漂流で著名な大黒屋光太夫(一七五—一八二八)の息子

：内題の後、改行して「阿羅祭亜來歴阿羅祭亜ハ莫斯科ビヤ

ナリ」とあり

4、山口県文書館(徳山毛利家文庫)

法量：二九・〇×二〇・五糎

形態：写本、一冊

紙数：一四丁

表記：漢字平仮名交じり文

外題：魯西亜志 附録(墨書打付)

内題：魯西亜志 附録

志筑跋文の年記・署名：寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名：癸丑十月録

蔵書印記：なし

貼紙：なし

備考：明らかに近代以降に後付されたと考えられる表

紙、裏表紙ならびに遊紙二枚は除いて書誌を記し

た

：内題の後、改行して「阿羅祭亜來歴阿羅祭亜ハ莫斯科ビヤ

ナリ」とあり

5、横浜市立大学学術情報センター（鮎澤文庫）

法量：二五・四×一八・二種

形態：写本、一冊

紙数：六丁

表記：漢字平仮名交じり文

外題：魯西亜志^{附録}（墨書打付）

内題：魯西亜附録

志筑跋文の年記・署名：寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名：癸丑十月録

蔵書印記：「鮎澤信太郎蔵書」（朱・陽）

貼紙：なし

備考：蔵書印者は、横浜市立大学教授などを務めた地理

学者鮎澤信太郎（一九〇八―一九六四）

学考：内題の後、改行して「阿羅祭亜來歴^{阿羅祭亜ハモスコヒヤナリ}」とあり

6、早稲田大学図書館

法量：二〇・〇×二一・七種

形態：写本、一冊

紙数：八八丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：俄羅斯紀聞（墨書打付）

内題：東砂葛記

（志筑）跋文の年記・署名：癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯

大槻跋文の年記・署名：なし

蔵書印記：「川田氏蔵書」（朱・陰）

貼紙：なし

備考：本書は古賀侗庵「俄羅斯紀聞」第一集第九冊

：本冊には「泰西圖說」卷之十二、「漂流紀事」、「辛

大夫口語筆受被」、「北樑畧聞^{（原本マダ）}」、「東砂葛記」、「加

模西葛杜加國風説 考」の六作品が収録されており、その中の「東砂葛記」の一部として「阿羅祭

亜來歴」に相当する部分が確認できる（「羅祭亜來

歴^{（比嘉チナリ）}」は六六丁裏〜七二丁表）

：「東砂葛記」には、「羅祭亜來歴^{（比嘉チナリ）}」に対する

古賀侗庵の奥書とその年記・署名「文化壬申冬

十一月冬至寫完 侗庵支離子識」あり

：「俄羅斯紀聞」第一集第九冊には「泰西圖說」卷

之十二、「漂流紀事」、「辛大夫口語筆受被」、「北

樑畧聞^{（原本マダ）}」、「東砂葛記」、「加模西葛杜加國風説 考」

の六作品が収録されており、その中の「東砂葛記」

の一部として「阿羅祭亜來歴」に相当する部分が

確認できる（「羅祭亜來歴^{（比嘉チナリ）}」は六六丁裏〜七二丁

表）

：蔵書印者は東京帝国大学教授などを務めた漢学者
川田甕江（剛）

二、志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」の概要

「阿羅祭亜来歴」は、フアレントンテイン『新旧東インド誌』(François Valentyn [1656-1727]: *Oud en nieuw Oost-Indiën. Te Dordrecht* : By Joannes van Braam ; Te Amsterdam : By Gerard onder de Linden. 1724-26.) の一部を抄訳した作品である。

具体的には、第一巻の第二編第三章 (Tweede Boek, Derde Hoofdstuk) の中の、欄外注 (marginalia) に「北方に東インドへの新しい道が、陸路で発見される」(Een nieuwe weg naar Oostindien in, t Noorden, te land, ondeckt.) と記された段落を起点として、そこから計十八段落を訳出している。

内容は、一五九六または九七年から一七二二年にかけて、年次を追ってロシアが東方に進出した来歴を描いたくぐりであり、途中、シベリアを併有した経緯や、ロシアと清朝が国境を画定したことで周知されるネルチンスクでの会谈の経過も記されている。

『新旧東インド誌』と「阿羅祭亜来歴」を突き合わせるかぎり、時折日付の詳細を訳さなかったり、何度も登場するロシア皇帝名の重複部分の訳出を行わなかったりと、文脈

に特に必要の無い部分での改変が見られるものの、基本的な志筑忠雄の翻訳態度は、注を付しながら原文に即して丁寧に訳していく姿勢を貫いていた。ただし、例外的にキリスト教に関わる記述については訳出を意図的に回避している。

まず、一六八九年七月三十一日にネルチンスクで行われたロシアと清の会谈をめぐるくだりでは、*deze Jezuiten* (これらのイエズス会士たち) という語を含んだ従属節の訳が脱落している¹⁰。その直後に続いて出てくる *De vaders Jezuiten* (イエズス会神父たち) については、「通事二人」¹¹と原文から離れた内容に改変されている¹²。かかる志筑忠雄の営為は、幕府に対する政治的配慮によるものと見て間違いない。

志筑忠雄は、六年後に訳出する「鎖国論」(一八〇一成)でもキリスト教関連の記述に対し、その色を薄める仕掛けを施している。それに加えて「鎖国論」の本文や志筑注には、時折自身の価値基準(植民地活動やキリスト教に対する反感・嫌悪)から発せられた改変や発言が認められるものの¹³、「阿羅祭亜来歴」(一七九五成)の段階において、価値基準から発せられた改変が確認できないことは留意すべきである¹⁴。

三、津市図書館本の資料的位置づけ

先述したように、津市図書館本の特徴として、まず志筑忠雄訳「阿羅祭亜来歴」が前野良沢「東砂葛記」の一部として所収されていること、次に当該部分の題名が「羅祭亜来歴」であること、そして「癸亥「一八〇三」十月 通詞志筑忠次郎譯¹⁵」との（志筑）跋文の年記・署名を有することに加え、さらには大槻玄沢跋文の年記と署名が不在であることが挙げられ、これは古賀侗庵自筆本である早大本（書誌6）の特徴と一致する。

また、洲本市立洲本図書館（書誌2）では、漢字平仮名交じり文で表記された本文が一続きに書かれているのに対し、早大本の本文は、漢字カタカナ交じり文で表記され、なおかつ段落が作られている。津市図書館本の本文は早大本と同様の表記および書式であるが、さらに段落の冒頭が台頭の形式で示されている¹⁶。津市図書館本におけるロシアの通貨単位ルーブルに付されている注も津市図書館本早大本と一致し、洲本本とは大きく異なっている。

その他、早大本系統の特徴として、志筑忠雄および大槻玄沢の二つの跋文が、「大槻玄澤兄追趣」として一つに圧縮されている。この部分を比較してみよう。

【早大本】

大槻茂質按ルニ「^レ」止白里ハ昔シ曠漠ノ韃韃トノミ称シタル地ナリ「^レ」伯多珠帝ノ時ニ至テ「^レ」阿比河ヨリ以東大韃且又東方北方ノ盡頭大東洋ニ至ルマテ悉ク併吞セリト本国ニ服属セシヨリ總称シテ魯西亞ト云フ「^レ」ヒブ子ルガ地誌ゼオガラヒーニ詳ナリ「^レ」桂川氏嘗ツテ其譯文アリ「^レ」魯西亞ト名クルトナリ「^レ」宜ク併セ熟見スヘシ¹⁷

【津市図書館本】

大槻茂質按ルニ「^レ」止白里ハ昔シ曠漠ノ韃韃トノミ称シタル地ナリ「^レ」伯多珠帝ノ時ニ至テ「^レ」阿比河ヨリ以東大韃且又東方北方ノ盡頭大東洋ニ至ルマテ悉ク併吞セリト本国ニ服属セシヨリ總稱シテ魯西亞ト云フ「^レ」ヒブ子ルガ地誌「^レ」ビオガラヒーニ詳ナリ「^レ」桂川氏嘗ツテ其譯文アリ「^レ」魯西亞ト名クルトナリ「^レ」宜ク併セ熟見スベシ

両者の記述に大きな相違点はないが、津市図書館本では外国の固有名詞に鉤括弧ならびにルビが付されている点が表記上の留意すべき差異として挙げられる。さらに注目すべきは、最初の下線部「ヒブ子ルガ地誌ゼオガラヒー」

という記述である。「ヒブ子ル」とはドイツの地理学者ヒューブナー (Johann Hübnér, 1698-1731) のことで、「ゼオガラヒー」とはヒューブナーの著書『一般地理学』の蘭語訳版 (*Allgemeine Geographie*) を指す。

津市図書館本の書写者はおそらく原典 (の綴り) に明るくなく、「Geographie」の音とは程遠い「ジオガラピー」という表記に疑問を抱かなかつたのだろう。もちろん前提として津市図書館本では「セ」と「ピ」は明確に書き分けられているが、最後の下線部「併セ」についても「併ピ」と改変されており、津市図書館本の転写者が「セ」と「ピ」を誤写したのか、それとも底本がそもそも誤記していたのかは定かではない。それ以外にも、津市図書館本ではしばしば漢字や送り仮名の明らかな誤りが確認できる。

また、津市図書館本には古賀侂庵系統本のみ有する「下原氏」で始まる侂庵の奥書が備わっている。

【早大本】

下原氏ノ如クナレハ魯西亜ノ本國ノ濫觴ノ来歴ノヨウニ聞ユルナレトモ「」本編ノ翻譯スル所ハ慶長三二年来韃鞢ノシヘリア東方ノ地方ヲ侵掠セシ来歴ナリ

【津市図書館本】

下原氏ノ如クナレハ魯西亜ノ本國ノ濫觴ノ来歴ノヨウニ聞ユルナレトモ「」本編ノ翻譯スル所ハ慶長三二年来韃鞢ノシヘリア」東方ノ地方ヲ侵掠セシ来歴ナリ

ここでもやはり津市図書館本では外国の固有名詞に鉤括弧が付されている。加えて、津市図書館本には、自筆本 (早大本) が有する侂庵奥書の年記・署名「文化壬申冬十一月冬至寫完 侂庵支離子識」が不在であることが大きな相違点である。

以上のように、津市図書館本が侂庵系統に属することは間違いないものの、その位置づけを考えるにあたっては、大きく次の二つの可能性が考えられる。すなわち (1) (国立公文書館本を経由するかどうかは別に) 津市図書館本が早大本に遡る場合、(2) 津市図書館本が早大本に遡らず、別の原本がある場合 (既にかかる特徴を有する原本があつて、そこから津市図書館本と早大本が別々の道筋で写された場合)。

いずれの可能性も否定できないが、(2) の場合、本文がどの時点で漢字ひらがな交じり文から漢字カタカナ交じり文に変更され、また、二跋文が一つに圧縮されたのか、という問題が浮上する。加えて、「下原氏」で始まる奥書

の当該部分は「し原名」の誤写であるが¹⁸、かかる誤りもどの時点で生じたのか。

ここで二つの問題を考えたい。まず、どの時点で外国の固有名詞に鉤括弧が付されたのか。次に、早大本に脱落している重要な一文が、津市図書館本にはなぜ備わっているのか。

まず最初の課題であるが、早大本、国立国会図書館本（書誌1）ならびに洲本本には外国の固有名詞に鉤括弧は付されておらず、それらの資料より「阿羅祭巫來歴」原本から距離が離れ、やや後世に成立したと目される静嘉堂文庫本（書誌3）、山口県文書館（徳山毛利家文庫）本（書誌4）、横浜市立大学学術情報センター（鮎澤文庫）本（書誌5）には時折鉤括弧が認められるが、津市図書館本のように徹底して付したものではない。

外国の固有名詞に鉤括弧を付した文章を底本として、転写した本で鉤括弧が不在になることは考え難いので、後から鉤括弧を付記したものと見るべきであろう。

さて二点目の課題であるが、先に触れた志筑忠雄による重大な改変箇所の一つ De vadens Jenuien（イエズス会神父たち）をめぐる記述であるが、早大本および国立公文書館本ではこの訳文が脱落している一方、洲本本は「其本陣に引取ぬ」「通詞二人事の敗れんとするを見て」と備えている。

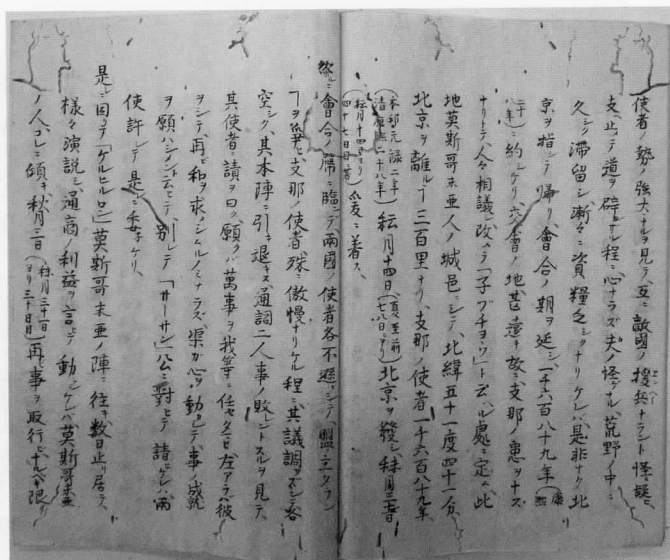


図3 左葉2行目最下方、津市図書館本では「各空シク」の後、先に引用した「其本陣ニ […]」の文章を経て、「其使者ニ」へと展開する

津市図書館本においては、「其本陣ニ引退キヌ」「一」通詞二人事ノ敗レントスルヲ見テ」と、僅かに下線部のような差異が認められるものの、この箇所を備えている。

資料が乏しい状態の中から性急に結論は出せないが、少なくとも津市図書館本の存在は、侗庵自筆本をさらに遡る段階で、既に侗庵系統本の特徴が備わっていた本が存在していた可能性を示唆している。その場合、侗庵奥書と呼んでいた「下原氏」に始まる文章は、別人の奥書ということになる。侗庵の年記・署名と「下原氏」に始まる文章の間に一行分の空白が存在するのは、そのことを示す断絶なのかもしれない。

ただし、繰り返しになるが、津市図書館本がこの文章を校訂して付加したのか、それともそもそも侗庵系統本の特徴が備わっていた本が存在していたかについての判断は、今後の資料発掘に俟ちたい。

おわりに

津市図書館（稲垣文庫）本「阿羅祭亜来歴」は、前野良沢「東砂葛記」の一部として所収されていること、ならびに先行の拙稿を除いてこれまで「阿羅祭亜来歴」研究が進展を見なかったこと、そのため「東砂葛記」に所収された形態で「阿羅祭亜来歴」が存在していることが認知を得ていなかった

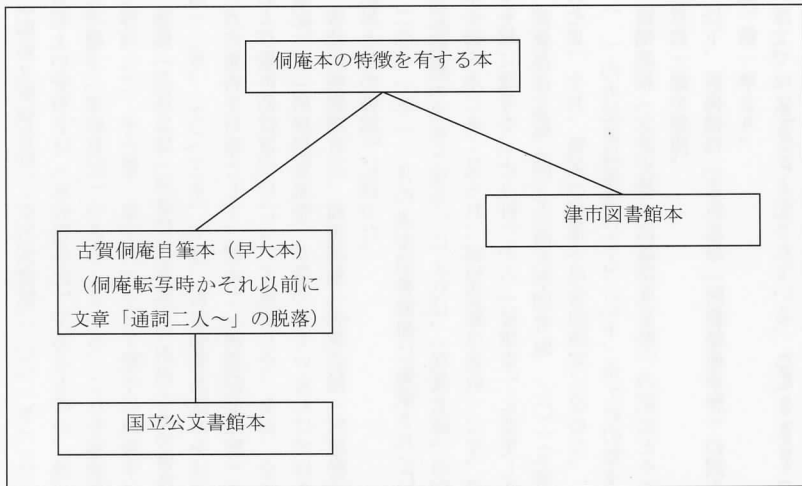


図4 新たに生じた侗庵系統本における転写関係の可能性

たことなどから¹⁹、その存在が看過されてきた²⁰。

本稿によつて、津市図書館本はその構成要素が古賀侗庵系統本と一致し、侗庵自筆本（早大本）および国立公文書館（内閣文庫）本に属するものと位置づけることができた。ただしその一方で、侗庵系統本の転写経路を検討するにあつて、より複雑な要素を齎す皮肉な結果ともなつた。

津市図書館本が齎した最も重大な事実は、志筑忠雄による重大な改変箇所の一つ「De vaders Jezuiten（イエズス会神父たち）」をめぐる記述の訳文が、早大本および国立公文書館本では脱落しているものの、洲本本と同様に、津市図書館本では備わっている点である。このことは、侗庵自筆本をさらに遡る段階で、既に侗庵系統本の特徴が備わつていた本が存在していた可能性を示唆している。この点のさらなる解明は、今後の資料発掘に俟ちたい。

いづれにせよ、七点目の「阿羅祭亜来歴」の発見は、その転写経路に新たな可能性を齎すことになつた。つまり津市図書館本の出現は、写本転写の複雑さと実態解明の困難を示し、歴史家があくまで限定的な史資料に基づいて「事実」を構築しているにすぎないことを改めて突きつける事例となつた。

注

- 1 「稲垣文庫仮目録」（津市図書館、二〇〇一年）、三三頁。なお、目録上の資料名は「東砂葛異記」であることから、後述するように内題が「東砂葛記」であることから、これを当該資料名として採用した。その際、原文のアラビア数字は漢数字に改めた。
- 2 拙稿「志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌」（『雅俗』第一二二号、二〇一三年）では、古賀侗庵系統本をはじめとする六 points の資料を対象として、初めて「阿羅祭亜来歴」の書誌系統および資料的位置づけについて解明した。なお、全ての「東砂葛記」に「阿羅祭亜来歴」が備わっているわけではない。
- 3 書誌の採録項目は、前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌」に従つた。
- 4 二〇一一年一月の津市図書館報に掲載されている中川豊「稲垣定毅の名称と別号」によれば、「從雉堂藏」の印記は転写本や購入本に多く見られ、稲垣定毅は寛政一〇年、或いは一一年を境に雅号を「止々軒」から「從雉堂」に変更した。
- 5 高橋昌彦主編（国立台湾大学図書館、二〇一三年）、六六―六七頁。なお、書名の繁体字は常用漢字に改めた。
- 6 「」内の記述は筆者による。以下、全ての引用文で同。
- 7 前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌」第三章第一節を参照。
- 8 以下、前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌」第一章より。
- 9 原文では Nipisjou と記されている。Oud en nieuw Oost-Indien, vol. 1, p. 114. なお、『新旧東インド誌』の底本は、初版を復刻

した Van Wijnen (二〇〇二～二〇〇四年刊) 版を用いた。「阿羅羅亞來歴」では原文に基づいて「子プチョウ」と表記している。この Nipsiou は、ネルチンスクの中国語「尼布楚」(Nihuchü) に基づいていると考えられる。

10 脱落文は *indien deze Jezuiten, er niet by geweest waren.* (もしこれらのイエズス会士たちがいなかったら)。*Oud en nieuw Oost-Indien*, vol. 1, p. 114.

11 洲本市立洲本図書館本(書誌2)より。また、早大本ではここをめぐる一行分の記述が脱落している。

12 *Oud en nieuw Oost-Indien*, vol. 1, p. 114.

13 「鎖国論」中に、西洋の植民地活動やキリスト教に対する志筑忠雄の反感が見られることについては、鳥井裕美子が詳細に論じている。「ケンペルから志筑へ―日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容―」(季刊「日本思想史」第四七号、一九九六年所収)。拙著『鎖国』という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史―(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)、八八～九一頁。

14 以上、本章は前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅羅亞來歴」の訳出とその書誌」第二章に基づいて記した。

15 「」内の記述は筆者による。以下、全ての引用文で同。また、志筑忠雄は少なくとも天明二年(一七八二)まで稽古通詞を務めていたことが確認されており、最長でも天明六年(一七八六)五月までの可能性がある。つまり、一八〇三年の時点で志筑忠雄は「通詞」では無い。したがって、この年記・署名は志筑ではない他者による後付であることは明らかである。よって年記

の信憑性も疑われる。前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅羅亞來歴」の訳出とその書誌」第三章第二節を参照。

16 国立公文書館本(書誌1)でも段落の冒頭が台頭している。

17 傍線は筆者による。また、現在通用しない異体字については現行のものに改めた。以下、全ての引用文で同。

18 前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅羅亞來歴」の訳出とその書誌」四一～四二頁。

19 その他、「阿羅羅亞來歴」には「魯西亞志附録」という異名もあり、前者が原題で、後者が後世の改変であることは、前掲拙稿「志筑忠雄「阿羅羅亞來歴」の訳出とその書誌」で論証した。

20 歴史テキストを探索する際、しばしば同様の現象に遭遇する。一例を挙げると、クリシタン系の宇宙論「南蛮運氣論」写本を追跡した結果、内容はそのものでありながら、題名には「天文書」や「天文要解」とのみ付され、その発見に困難を極めたような事例も報告されている。平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』(花書院、二〇一三年)。

【付記】本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)(研究課題番号: 23520113)の成果の一部である。